

書評と紹介

聖心女子大学キリスト教文化研究所編・加藤信朗監修
『共生と平和への道』

——報復の正義から赦しの正義へ——

春秋社 二〇〇五年二月二五日刊
A5判 viii+三二六頁 二五〇〇円+税

土井健司

現代世界に生きる者として、また宗教を信じる者として、この世界の紛争や戦争をなんとかしたいとの想いは切実にある。しかし同時に、一体自分には何ができるのかという諦めの気持ちも、またリアルである。何か個人を超えたところで世界が動いていて、かろうじてその端にしがみついている。が、なんだか訳の判らない状況に巻き込まれているという感覚に襲われる。この感覚から逃れるためには、自分の目の前に没頭するしかない。仕事、家庭、大学など。しかしそうしているうちに、世界は何処かへ動いていく。

本書を手にした時、正直いまさら言葉や議論の問題でもないだろうと思った。平和論や正義論というものはたんなる議論にすぎず、現実を動かす力はない。言葉は数多くの経験と強い意思を基盤にしてはじめて力をもつ。それに対して、一般に学者の言葉は経験や意思とは別次元で営むべき所がある。それゆえこの世界にとって切実な平和と正義の問題に、そのような議論がなにか寄与するのであろうか。不埒にも、このような思いを

抱きつつ本書を繙いた。

いや、本書が現実の世界平和にどれほど寄与するのか、評者には判らない。ただ通読してみても、何か勇気が湧いてきたのも事実である。「勇気」というのは大げさかもしれない。しかし言葉に対する信頼、やはり平和や正義について真面目に考え、論じなければならぬとの思いが高まってきた。多彩で、優れた論集だと思われる。

まず目次を挙げて、全体の構成を紹介したい。

序 地球化時代に播かれる一粒の種

加藤信朗

I 新しい公共世界の構築をめざして

デモクラシーの基本理念と現代におけるその理論的諸形態

岩田靖夫

正義と公共性

井上達夫

テロリズムと国際社会の論理

三輪公忠

国連と女性——ジェンダー・エクイティーへの道

青木怜子

II キリスト教における正義と公正の理念と実践

正義とアガペー——イエスは正義の問題にどのようなにかかわったか

遠藤 徹

信実なる正義——旧約聖書におけるツエダカー、ツエデク、ツ

アディーク

加藤久美子

塗油する女・イエスの赦し

森村信子

マザー・テレサー無告の民への献身

和田町子

III 多文化伝統における正義と公正の理念と実践

古代中国における「義」の展開——「義」「仁義」「礼義」

久保田知敏

開かれた倫理へ——古代インドにおける仏教の出現 下田正弘

イスラームにおける共同体・正義・公正 小杉 泰

日本思想における正義と公正——本居宣長の場合 清水正之

文明間の対話と共生への視点——「世界史」を読みかえる

吉澤五郎

IV 正義と公正をめぐる先覚者たち

政治における正義——ハンナ・アーレント 千葉 眞

正義を担保する注意力——シモーヌ・ヴェイユにみる宗教と科

学の効能

存在の乱調——E・レヴィナスと他者〈顔〉 富原眞弓

フィクションの王国——マーガレット・キャヴェンディッシュ

の政治思想

安達まみ

V 新しい千年紀を展望するキリスト教的視点の確立

人間の尊厳と国家のあり方——世界平和の構築をめざして

森 一弘

報復の正義と赦しの正義——共生の正義を求めて 加藤信朗

序によると、本書は聖心女子大学のキリスト教文化研究所における四年間の共同研究をもとにし、その主題は「正義と公正」(Justice and Equity)であったという。アメリカが「正

義」の名のもとに対テロ戦争を行うことに対して、また広く世界で展開されている紛争、戦争について、正義と公正の問題を考え、キリスト教の視点から平和の構築に寄与することが目的であったようである。もつとも「キリスト教」とは言い、目次を見ると判るように、キリスト教に関する論考ばかりではない。広く開かれた観点からこころみている。こうした開放性は、今日宗教の視点から議論を展開するときには欠くことのできない姿勢であろう。

多数の執筆者による共著というものは、得てして寄せ集めの論集になってしまう。本書の場合も、目次を一覧したかぎりではそのような印象もあろう。しかし監修者の人格の力と言うべきか、読んでみると何か統一的な印象が刻まれる。全体的に言うなら、報復に正義はないこと、報復とは別の正義の可能性を探ることが各論考を通底する基調であると言える。その上で本書に見られるような様々な視点からなされた多彩な考察が全体として必要だと感じられる。本書の論考の一つひとつが、正義と平和という事柄を考えるためにさまざまなヒントを与えくれる。ここでは宗教研究の視点から、宗教に関わる論考をいくつか選んで見ていきたい。

まずは第二部に収められているキリスト教関連の論考である。

遠藤徹氏の論考「正義とアガペー——イエスは正義の問題にどのようなかわつたか」では、主に万人を等しく尊重する公正の正義とイエスのアガペーの関係が思索されている。人格を自体的な目的と定めて、自律した理性による他の人格への尊敬

書評と紹介

がカントの議論であるとされ、続いてその問題点が指摘される。カントにおいては、現実には他の人格を尊敬しない者の問題が解決されない。なぜなら他の人格を尊敬しないことは、たとえば所有欲に支配されており、理性の自律に至っていないからであるが、そのような状況にある者をどのようにして自律に至らしめるのかの議論がないからである。理性というものの普遍性を単純に肯定しているところに、カントの樂觀主義があると指摘する。そこでイエスのアガペーが論じられる。つまり、未熟な理性的意志が自らの不甲斐なさに苛立ち、自らに反抗すること、つまり自己嫌悪に陥る理性をイエスのアガペーは受け入れ、包み込み、共に立つ。そうして理性の自律を生み出すという。それは理屈ではなく、愛を受けた者が愛の実践に立ち上がるという類いの実践的出来事である。このようにしてイエスのアガペー、十字架に至るアガペーが万人を等しく尊重する公正の正義を根拠づけるとする。万人を尊重する正義というものが、実践的にイエスのアガペーによって実現するというわけである。この論考を読んだとき、評者はイエスをロゴスとし、その力（デュナミス）を主張した二世紀の弁証家ユスティノスの思想を思い起こした。

加藤久美子氏の論考「信実なる正義正義——旧約聖書におけるツエダカー、ツエデク、ツアディーク」では、旧約聖書における正義、ツエダカー、ツエデクなどが応報的正義ではなく、人格的なものとして、「信実」の意味で二者関係における信実と社会正義を意味することが論じられる。社会正義に関してはエジプトやメソポタミアにおける正義概念（マアト、キット

ウ／ミィシャル）との比較を通して、王ではなく、イスラエルの民がこれを行うよう求められ、王の務めの「民主化」が計られたと指摘される。旧約については碩学フォン・ラートの旧約聖書の聖戦論や木田献一氏による預言者の平和論あたりは評者も親しんできたが、近隣諸国との比較において旧約の「正義」概念を論じることが、この論考のユニークなところであろう。また二者間の交わりの危機における「信実」についての考察も評者には印象的であった。

森村信子氏の論考「塗油する女・イエスの赦し」では、ルカ伝に見られる「罪の女の塗油」の記事をめぐって論述が展開する。そこでは非難される女、非難するファリサイ派の人々、そして女を赦すイエスの三者が描かれ、論じられる。その筆致は独特のリズムを備え、進んでいく。罪に苦しむ女性が最後に信頼したのがイエスであり、イエスはこれに応えるという。最後に赦すイエスの姿を通して、「この今も、自己や戦争で愛する者と巣別した女、利用されるだけで愛されていない女、殴られたり蹴られたりして繰り返し暴力を受け、傷だらけになった女性が存在しているのだ。何で共に泣かずにいられよう」（一一六頁）と語り、共生の情を披露する。対立と差別の世界からの新生としてこの共生を捉え、「ささやかな復活」を主張して閉じる。

和田町子氏の論考「マザー・テレサ——無告の民への献身」では、マザー・テレサの活動が論述されるが、彼女の活動が何か慈善活動のシステムに則るものではなく、むしろ一人の見捨てられた死に往く者を看取るところからはじまっているとの指

摘がなされている。後半は、この視点から聖書における義の問題に対する解釈が展開する。評者は昔マザー・テレサの活動について、日本の或る人から批判を聞いたことがある。彼女の活動はただ看取るだけで、その人の自立を考えていない。行き倒れた人が癒されて、自分で生きることができるよう援助すべきであって、そのための制度が必要なのだ、と。しかし制度を整備し、自立の道を備えることがよいとしても、マザー・テレサのような人は別次元のことをしているのではと感じた。この人はなによりも目の前の人に向かっていったのであって、いわば「我と汝」としての関係に生きた人ではなかったか。人間の生活には別に「我とそれ」の面も必要不可欠であり、それが制度や自立の道を備えることになるのだろう。しかしマザー・テレサという人は二者の関係を生きたのであって、この論考から主にこの点を学んだ。

続いて、第三部からは二つの論考を取り上げたい。

まず、下田正弘氏の論考「開かれた倫理へ——古代インドにおける仏教の出現」では、ヴァルナ・カースト制度においてバラモンの築いた社会におけるブッダの思想の意味が、他者論の視点から論じられている。ヴァルナ・カースト制度は輪廻と業において完結した世界であり、世界の秩序を構成する。しかしそこには未知のもの、他者というものの余地がないという。すべては因果であり、万人はいずれかのカーストに属する者であって、個人ではない。そこに他者と未来の不在という倫理上の問題を指摘し、この点でブッダは画期的な思想を展開したという。なぜならブッダは労働を否定してカーストから開放され、

無常を説いて未来へと自己を開いたからである。さらに悟りを得たブッダが他者に向けて説法をしたことは、他者へと自らを実践的に開いたことを意味するという。ブッダの他者論として興味深い論考だと言える。

小杉泰氏の論考「イスラームにおける共同体・正義・公正」では、イスラームの視点から正義と公正についての議論が展開されている。この種の論集においてイスラーム関係のものは啓蒙的なものが多く、この論考も多分にその要素が強い。広く正義と公正について論じ、基本的事項を紹介する。しかし、イスラームを欧米の視点から議論することへのアレルギー反応からその独自性を強調することに躍起になる論文を見ることがあるが、ここではそのようなものではなく、とてもバランスのとれた議論が展開されている。氏自身のイスラーム研究の立場なのであろうか。とりわけ「イスラーム法学ルネサンス」なる概念のもと、イスラーム法の「解釈の革新」の必要性を述べ、現代世界に対応したものを啓典の中に見出す動きがあるなどの議論には、宗教間対話の可能性を含め、共存、共生への道を示すものである。

そして、第五部の二編を取り上げたい。ここで個別的な議論ではなく、もっと大局的な視点に立った議論が展開されている。

まず、森一弘氏の論考「人間の尊厳と国家のあり方——世界平和の構築をめざして」では、最初に日本カトリック司教団の「いのちへのまなざし」が論じられ、二〇世紀の戦争の問題、そしてヨーロッパ、アジア、アメリカにおける近代国家の成

書評と紹介

立、有り様が批判的に語られる。中でもアメリカ合衆国への批判は厳しい。論考の最後に、三つの主張が提示されているが、国際化の時代にふさわしく、国家の枠組みを相対化する仕方で閉じることなく、対話のルールを定め、人間の尊厳を大切にすることが肝要であるという。

最後、この論集の監修者である加藤信朗氏の論考「報復の正義と赦しの正義——共生の正義を求めて」では、主として本書の表題にもなっていた「赦しの正義」について、報復の正義との対比を通して論じられている。ギリシア哲学を背景に日本語の「よい」「ただしい」といった概念が論じられるが、その際の主張点は「ただしさ」が何か法則、規則に合致するという意味ではなく、「ひととの関わりにおけるただしさ」として親しさと和合を形成するということである。さらにまた、これに立派さ、よいことが加わることで人間の公共体が実現するという。こうして正義と公正さを論じ、報復と赦しについてそれぞれが正義であるかどうか論じられる。そこでは、報復というものは決して以前の物事を元通りにするわけではないことから、ただしさを回復することはないと否定される。これに対して、赦しこそが「ひととひととの関わりのひとしさ」を回復するという。赦しの正義とは、赦しを通して人間同士の関係が修復され、親しさを生み、公共体を構成することに寄与する点に認められるわけである。一六世紀のエラスムスは『格言集』のなかで「戦争は経験せざる者には甘美である」という格言に長文の戦争批判を付しているが、そのなかで「正義のための戦争」を否定し、愛や赦しを説いていた。「赦しの正義」という

概念はきわめて示唆的であり、一層考えていかねばならないものであろう。

さて、他にも富原真弓氏の「正義を担保する注意力——シモーヌ・ヴェイユにみる宗教と科学の効能」、また宮本久雄氏の「存在の乱調——E・レヴィナスと他者〈顔〉」といった論考があるが、本誌で取り上げる範囲を超えているのかもしれない。いずれも示唆に富んだ論考であった。その他の論考も同様に示唆的であり、中にはスリリングなものすらあった。宗教の立場から言えば、さらにユダヤ教の視点からの論考が読みたかったこと、また事柄として聖戦の問題は論じられてよかったように思う。いや、欲張りすぎであろうか。

最後に一言。本書は評者の心をとらえた。その意味で、序において監修者の述べる「一粒の種」が播かれたのかもしれない。本書を通して得たこの種を育てつつ、評者自身も平和と正義の問題に何かしら一石を投じる務めがあるように感じた。